鎮安堂

飛虎將軍

臺南市海尾朝皇宮管理委員會管轄境鎮安堂

廟址：臺南市安南區大安街730-1號

電話：(06)2478884　傳真：(06)2466189

鎮安堂·飛虎將軍 緣起

鎮安堂（飛虎將軍），座落於台南市安南區大安街730－1號，隸屬於海尾朝皇宮管理委員會，建於民國六十年，本廟供奉日本海軍飛行員杉浦茂峰少尉。為何一位日本軍人會受到本地居民的尊崇？何以被尊稱為「飛虎將軍」呢？

民國三十三年，美軍大舉展開台灣航空戰，以作為從事菲律賓作戰的前哨戰，於是迅速挑起台灣航空決戰，猛烈的空襲台灣各地。

十月十二日上午七時十九分，台南、高雄的上空已響起轟隆巨響，情況危急，迫在眉睫，日機倉促升空迎擊，二十分戰鬥開始。

在一陣陣你來我往的纏鬥之後，眼看日機一架又一架的被擊落，情況不妙，但是日軍戰鬥機絲毫不退卻，依然很神勇的施行衝撞。依據當時目擊者說，有一架戰機在槍林彈雨中勇敢應戰，不幸尾翼中彈著火，瀕臨爆炸的惡運。這時，飛機從高空陡直急降，飛行員俯瞰「海尾寮」大部落，也許是被可能爆炸後驚悚場面所震懾，暗忖著：現在跳下去，也許自己還有生還的機會，但是好幾百戶的房屋，一定會起火燃燒。以竹子及木材泥土造的房屋，一旦火勢蔓延開來…後果不堪設想…

剎那間的判斷，只見機首吃力的被拉高，轉變方向，往部落外圍東邊飛去（現在的同安路一帶，當時都是農地、魚塭），飛機於空中瞬間爆炸。飛行員跳傘逃生，不幸被美軍擊中降落傘，從高空墜落於稻田仰躺，（成大字型）而陣亡。他的軍靴寫著「杉浦」，後經原日本二零一海軍航空隊分隊長森山敏雄上尉的協助，得知該飛行員為他的隊員「杉浦茂峰」兵曹長，戰歿後褒昇為少尉。

大戰結束數年後，有人目睹一位戴白帽、穿白衣服的人，經常徘徊於養殖場附近。起初，以為是趁黑夜來偷魚者，待跑過去查看，又見不到人影，此事非比尋常。爾後目睹此怪現象的村民更多，甚至繪聲繪影，也有人被託夢，傳言四起，人心惶惶。最後經請示海尾朝皇宮保生大帝，說是空戰陣亡的幽魂顯靈。

經保生大帝的指示，始喚起當年目擊者的回想，原來那架俯衝海尾部落的飛機，是為了怕波及千萬無辜的生靈，才犧牲了自己的生命。因此在地方有志人士的共識之下，決議於墜機的地方建祠祭祀（民國六十年），以感謝拯救海尾部落的恩人，永久表彰杉浦的恩德。

自從建祠奉祀以後，地方平安，五穀豐收，六畜興旺，「飛虎將軍」深受部落居民的尊崇，每天前來參拜的民眾不計其數，自日本遠道而來的參拜團，更是絡繹不絕。

民國八十二年，隨著經濟起飛，人人生活安定，由朝皇宮管理委員會提議通過，把原來只佔地四、五坪的祠，改建為堂。由於信徒的鼎力相助，完成為台灣風格的光輝燦煌的造形，紅瓦的屋頂，高大的石柱，美侖美奐。廟宇的正面，懸掛著書寫「鎮安堂·飛虎將軍」的匾額。「鎮安」是鎮邪安民之意，「飛虎」是戰鬥機之意，也是飛行之意。「將軍」則為奉祀的人物，無論官階高低，一律尊稱為將軍。廟宇佔地五十坪。高大的石柱，皆為大理石製成；廟宇的內外牆壁都鑲著大理石，上面雕刻歷代英雄史蹟，除了追思外，還有教化作用。（以上建設，皆為信徒自動捐獻）。大理石柱子上刻著詩句。這些詩句，含意深遠，對於飛虎將軍的尊崇，表達得淋漓盡緻。詩中出現「正氣」、「護國」、「英雄」、「忠心」、「大義」等字樣，都是極力讚揚其壯烈成仁的精神。

杉浦茂峰生前英姿

本堂早晚由廟祝點燃三只香煙供奉，並播放日本國歌「君が代」及海軍行進曲「海ゆかば」。供桌兩旁豎立中華民國國旗及日本國旗。正殿供奉三尊神像，中間為本尊，左右兩尊為分身，其中兩座分身是為應信徒之請，迎奉於家裡供拜的。本堂的主神「飛虎將軍」親自下駕，宣示願隸屬於朝皇宮管轄之後，管理委員會就積極整理及致力於促進中日文化交流，使日本學術文化界更加瞭解我國。

行事曆

- 農曆10月16日　聖誕千秋
- 農曆 6月20日　賞　　兵
- 農曆 7月15日　中元普渡
- 農曆12月20日　賞　　兵

臺南市海尾朝皇宮管理委員會管轄境鎮安堂

廟址：臺南市安南區大安街730-1號

電話：(06)2478884　傳真：(06)2466189

鎮安堂

飛虎将軍

台湾台南市海尾朝皇宮管理委員会所管廟
鎮安堂・飛虎将軍
住所：台南市安南区大安街730-1号
TEL：+886-6-247-8884
FAX：+886-6-246-6189

鎮安堂「飛虎将軍」 -台湾で神と祭られた日本軍人-

台南市の北西五キロの郊外に、今も日本からの参拝者が絶えない「鎮安堂·飛虎将軍」がある。祭られているのは、太平洋戦争中台南上空の空中戦で、壮烈な戦死を遂げた大日本帝国海軍航空隊少尉「杉浦茂峰」（当時兵曹長）である。なぜ日本軍人が神として祭られ、「飛虎将軍」と尊称されているのか。その「秘話」は.....

話は一九四四年十月十二日に溯る。太平洋戦争も末期に近く、アメリカ軍は、フィリピン攻略作戦の前哨戦として、台湾各地に空襲を行った。その日の午前七時十九分アメリカ軍が台南来襲、日本の「零戦」はこれを迎撃、二十分には戦闘開始。日軍は勇戦に努めたが、数に勝るアメリカ機群に衆寡敵せず、一機又一機と撃墜されていった。中には体当りを敢行したのもあった。この空中戦を目撃した者の話に依れば、一機の零戦も敢闘よく敵を制したが、いつの間にか無念にも敵弾を受けて尾翼より発火し、爆発が寸時に迫る危機に瀕した。飛行士は部落に目がけて急降下の最中、何気なく地上をみたら、何と下は「海尾寮」という大部落。ハッと身も凍る思いに襲われた。

今飛び降りたら自分は助かるかも知れない。
けども、何百戸という家屋は焼かれるだろう
竹や木と土で造られた家屋は、
一旦火が着くとすぐに焼かれるだろう。

.....

こう判断した飛行士は、すぐ機首を揚げて、上昇の姿勢に移った。上昇すると、部落の東側（同安路一帯、当時は畑と養殖池）に向かって飛び去った。戦闘機は空中で爆発したが、飛行士は落下傘で脱出した。しかし、不幸にもグラマンの機銃掃射を浴び、落下傘は破れ、飛行士は高空から早いスピードで地面に叩き落ち、仰向けの状態で畑の中（飛虎将軍廟附近）に落ちて戦死した。軍靴には「杉浦」と書かれていた。其の後、元第二〇一海軍航空隊分隊長、森山敏夫大尉の協力に依り、「杉浦茂峰」と判明した。

終戦（1945年）後何年か経ち、部落の人が白い帽子を被り、白い服を着た人物が常に養殖池附近を徘徊するのを目撃した。最初は闇夜に紛れ、魚を盗みに来た者と思い、追いかけていくが姿を消し、これは尋常な事でないと気付いた。その後、この怪奇現象を見た者が増え、ある者は、夢に出てきたと話し、この様な話が至る所で起こり、人々は恐怖に慄いた。海尾朝皇宮の神「保生大帝」にお尋ねしたら、戦時中の戦死者の亡霊だと言うことであった。

その後、部落の人たちは、この亡霊は戦時中部落を戦火から救う為に、自分の身命を犠牲にした飛行士ではないかと判断し、部落の恩人に感謝の念を捧げる方式を討論し、台湾人が謝恩の最高な表現で、つまり祠を建てて、永久に海軍航空隊杉浦茂峰少尉の恩を顕彰することに決定した。1971年、祠が建設された。

祠は小さい乍らも（敷地は四坪程）部落の人々の尊崇を集め、毎日遠近から参拝者が多く、特に日本からの参詣者も年中絶えない。

一九九三年、朝皇宮管理委員会の提案で、四坪の小さい祠を再建する事になる。多くの信者の協力によって再建された廟は敷地五十坪、台湾風のきらびやかな造り、朱色の屋根瓦、それを支える柱は大理石の豪華な物。大理石の壁には、有名な歴史物語の絵が彫られている。床もイタリヤ産の大理石。これらすべては、信者の奉献でした。大理石の柱には詩が刻まれ、その中の「正義」「護国」「英雄」「忠義」「大義」は、全て「飛虎将軍」に対する崇敬と壮烈な戦死を讃えている。

廟の正面には「鎮安堂·飛虎将軍」と書かれた額が掲げられてある。「鎮安」とは、邪気を鎮め民を安心させるの意味で、「飛虎」は戦闘機の意味、「将軍」は神として祭られる勇士の尊称である。正殿には本尊「杉浦茂峰」の神像、両側には分身二体が奉安されているが、これは無名の像ではなく、信者に請われば、本尊の代理として、短期間その家に迎奉され、お出ましになる。廟守は朝夕二回、煙草を三本点火して神像に捧げ、朝は日本国歌「君が代」、午後は軍歌「海ゆかば」を流す。供卓の両側には中華民国と日本の国旗が立ててある。

本廟が朝皇宮保生大帝（海尾部落の守り神）に同属した後、管理委員会は廟の管理、及び台日交流、日本学術文化各界と台湾の橋渡しに貢献している。

來廟参詣の日華(台)親善友好慰霊訪問団一行(2011.11.23)

鎮安堂・飛虎将軍年中行事

1、生誕記念日：陰暦十月十六日
2、五営慰労日：陰暦六月二十日（賞兵の日）
3、お　　盆：陰暦七月十五日
4、五営慰労日：陰暦十二月二十日（賞兵の日）